萩野脩二先生を偲んで

河田悌一

関西大学名誉教授・萩野脩二先生（一九四一～二〇二二）が、昨二〇二二年十一月十八日、急逝なさいました。私は友人の一人として、ここに衷心からの哀悼の辞を捧げたく存じます。

京都大学人文科学研究所で竹内実先生が主宰された「現代中国研究班」でお知り合いになって以来およそ半世紀、私にとっての萩野先生は〝布衣之交〟を保つ、まさに互いに心を許し合うことのできる友人であり、また四歳年長の先輩でもありました。

東京にお生まれになった先生は、京都大学文学部にご入学後、教授をなさっていた著名な吉川幸次郎先生、小川環樹先生に師事。中国古典文学の確乎たる教養と学識を基礎にして、近現代中国の文学を研究なさってこられました。京大大学院修了後、しばし奈良女子大学附属高校で教鞭を執られた後、三重大学助教授、教授を経て一九九一年四月、関西大学文学部中国文学科に来てくださいました。そして二〇一二年に古稀をもってご退休なさいました。高校で教鞭を執った経験を有する先生は、大勢の学生諸君に巧みに中国文学の面白さを教えるとともに、大学院において多くの優れた研究者を養成なさいました。

萩野先生が関西大学にお越しになってからは、通勤の阪急電車の中で、また徒歩十分というお互いの自宅のほぼ中間点にある銀閣寺のコーヒー店で、揃って好みの〝紅茶〟を飲みながら、竹内先生の編集で出版された『原典中国現代史』（岩波書店）、『中国近現代論争年表（一八九五～一九八九）』（同朋社）などの原稿の打ち合わせをしたり、中国の学術や激しく動く政治的動向、中国や台湾との学術交流、さらに学内の人事や学生・院生諸君の就職などさまざまな問題を話し合うことによって、研究者としての「凛とした気持ち」を鍛えていただきました。

先生は、関西大学に来られてからも、実に多くの著作を上梓なさいました。

『中国〝新時期文学〟論考：思想解放の作家群』（関西大学出版部、一九九五）、『中国文学の改革開放：現代小説スケッチ』（朋友書店、一九九七）、『謝冰心の研究』（朋友書店、二〇〇九）、『中国現代文学論考』（関西大学出版部、二〇一〇）、『交流絮語』、『古稀贅語』、『蘇生雅語』（三恵社、二〇一一～二〇一三）などを精力的に執筆され、次々に刊行されたのです。

それだけではありません。教え子の方々と一緒に、『天涼：中国現代・当代小説・あらすじと感想』（第一～十巻、三恵社、二〇

〇一～二〇〇七）を編集出版。また、謝冰心『家族への手紙：謝冰心の文革』（牧野格子共訳、関西大学出版部、二〇〇八）、李城外『追憶の文化大革命――咸寧五七幹部学校の文化人』（上下、山田多佳子共訳、朋友書店、二〇一三）、さらに四名の教え子の方々と『翠山：《五七幹部学校》小説選』（万場るり子、松尾むつ子、鎌田純子、山田多佳子と共訳、二〇二一年七月）と題する興味深い翻訳書をも監修出版されました。

先生は私どもの年代にはめずらしく、パソコンを巧みに駆使して「フェイスブック」を立ち上げて、日々の生活と生業、読書記録、人物評価を発信しておられました。一昨年春、叙勲した私が「老驥　櫪に伏すも、志　千里にあり」とのべた『毎日新聞』の記事を見つけて、すぐにお電話くださり、「河田先生は未だ老驥などではありません。まだまだ社会のため、日本の大学教育のため、貢献なさらなくてはなりません」という、身に余る励ましの言葉をかけてくださいました。

そして、十一月初めにも、京大病院の病室から留守番電話を頂戴。翌日には、在宅した私に「特別病棟から一般病棟に変わりました」とのご報告がありました。私が、「退院されたら、ぜひ銀閣寺の〝ワールドコーヒー〟で、また〝紅茶〟を飲みましょうね！」と申し上げました処、「河田先生の声を聞いたので、元気がでました！」と弾むお声でいわれたことが、今も耳に残っております。

元気で回復なさるもの、と思っておりましただけに、まさか先生が新型コロナ感染症でご逝去されるとは、悲しい限りであります。萩野脩二先生に心からの感謝を申上げますとともに、先生のご冥福とご家族のご多幸を祈念申し上げ、お別れの言葉とさせていただきます。

（関西大学名誉教授）

萩野先生千古

内田慶市

「うっちゃん」、あの声がまだ耳に残っている。

萩野先生は私の一年後に関大に赴任されたが、爾来、十一年間、親しくご一緒させていただき、ご退職後も、フェイスブックでずっと繋がっていただいていた。

私がつまらぬ本を送りつけた時も、真っ先に「うっちゃん、ありがとう」というお返事や過分なるお褒めの言葉をいただいた。専門は違っても、私の仕事を誰よりも分かっていて下さったのは先生だったような気がする。

それにしても先生は生涯学者を貫かれた。病魔に苛まれても健筆は全く衰えることはなかったし、フェイスブックでの書き込みをずっと御本にまとめて出版されていた。

先生の書かれる文章は理路整然としていながら、そこには温かみと何よりも愛情が込められていた。

それでも、やはり、病気との闘いは尋常ではなかったはずであり、思うようにならない自分の体に悔しさを覚えておられたはずである。

フェイスブックの書き込みの中からもそのことはうかがえる。

私がある時、「先生、どうか呉々もご自愛下さい」と書き込んだとき、「ありがとうございます。いつまでもグズグズしていないで早く歩けるようになりたいです。」という返信があったし、次の雑感はまさに先生の心情の一端を吐露されたものである。

雑感

東の小窓からざわざわと揺れるツタの葉が緑色を強くしていくのを見つめていると、春ではなく、初夏になったのだと思わざるを得ない。気温が五月並みの日が続いている。そのくせ朝晩は結構冷えるから、私は調子が悪い。とりわけ心不全により胸がドキドキして、苦しいのだ。

そういう次第で、今日土曜日のリハビリも休んだ。今月は一回も参加できなかった。家にハァハァ言いながら帰ると、先日植木屋を入れてきれいになった、というよりは草木をすっかり伐採された我がプロムナードに、ポツンと赤い点があった。なんとバラが咲いていたのだ。・・・（二〇二一年四月二十四日）

その知らせは、萩野先生の愛弟子の鎌田純子さんから受け取った。そのメールを読んだとき、思わず呆然とし涙があふれた。そ

の約一か月前に同じく鎌田さんからは先生がＩＣＵに入院されていて足を切断しなければいけないかもという話もお聞きしていたので、一度お邪魔しようと案じていた矢先であった。あの時、やはり、飛んでいけばよかったと後悔している。

ただ、先生とは分裂前の良き関西大学文学部中国文学科の時代にご一緒できたことが私にとって最大の倖せだった思っている。

どうか、先生、安らかにお眠り下さい。

合掌

（関西大学名誉教授）

记萩野先生二三事

陶　德　民

从内田先生的电邮中得知萩野脩二先生去世的消息，感到很意外也很悲伤。

一九九六年春，我从美国麻省州立布里奇沃特大学转来关西大学任教。因为先生特别直率认真而又平易近人，中文也说得很流利，加上中午在中国文学科合同研究室用餐的往往只有先生和我两个人，边吃边谈或是饭后聊天的机会较多，所以从先生那里学到了不少知识，对先生的了解也逐渐加深。

听说先生于一九八〇年代初期曾在北京第二外国语大学担任过外籍教师，所以对中国的情况比较熟悉。这段难得的经历对先生研究改革开放后的新时期文学无疑是有极大助益的。这两天重读先生与竹内实先生合编的译文集《文革、そして自由化のなかで——中国文学最新事情》（サイマル出版会、一九八七年二月），从其中所收录的刘宾雁、刘心武、张贤亮、王蒙、戴厚英、高行健、苏淑阳和遇罗锦等十六位当代作家的十五篇小说（其中一篇为两人合著）来看，确实反映了改革开放早期那种思想解放和百花齐放的氛围，把握住了当时的时代脉动，弥足珍贵。后来先生在此基础上完成了其代表作《中国〝新時期文学〟論考 思想解放の作家群》（関西大学出版部、一九九五年三月），我也有幸得到一本赠书，还请先生签了名。记得书的封面采用的是墨绿色，给人一种特别厚重的感觉。

二〇〇一年起，先生开始连续编辑发行同人杂志《天凉》，多达十卷，共有一〇二号，在坊间很有人气。执笔者大多是先生的弟子、友人和粉丝。我也曾投稿一篇，题为《民国初期のアメリカ留学秘話——常州の陳姉妹を手掛かりに》，被刊载在第二号上。文章从二〇〇〇年圣诞夜在上海南京西路的梅陇镇酒家参加陈衡粹女士的百岁寿宴谈起，说到其丈夫，一九二三年与谢冰心、吴文藻、许地山和梁实秋等同船赴美留学，以倡导国剧运动闻名的余上沅先生（一八九七—一九七〇）。余在卡内基梅隆大学和哥伦比亚大学留学回国后，曾担任新月书店第一任经理和大学教授，一九三五年春作为次席顾问兼导演陪同梅兰芳访苏演出后，出任新设立的国立戏剧专科学校的校长。解放后先后为复旦大学教授和上海戏剧学院院长，也有过一段颇为坎坷的经历，最后在文化大革命中病逝。文中也提到了陈女士的二姐、在瓦萨学院和芝加哥大学留学期间曾以莎菲女士的笔名写作的陈衡哲（一八九〇—一九七六，北京大学历史系西洋史教授），以及我自己在上海社科院历史所工作时曾经研究过的平民教育家、与胡适一起在哥伦比亚大学师从杜威的陶行知（一八九一—一九四六）先生等。二〇〇二年秋，我姐姐陶德华和其丈夫余安东（余上沅的三子）从德国来大阪看我时，我还专门请萩野先生拨冗在合同研究室与之见面，四个人一起聊得很开心。

萩野先生的最大贡献之一，也许可以说是他接受了旅日作家、现在神户国际大学执教的毛丹青的建议，在二〇〇六年把六年后获得诺贝尔文学奖的莫言请来关西大学做即兴讲演。因为这确实是关西大学文学部和中文教研组所成功举办过的一个盛会。据毛教授最近

获悉萩野先生病逝后在微博上发的消息，他们两位相识还是一九八七年其在萩野先生执教的三重大学念书时，可谓渊源非浅。在他看来，「萩野脩二教授在关西大学期间，可谓是中国文学研究的黄金时代，除了他本人对冰心文学的研究之外，还有日下恒夫教授对老舍文学的研究，在业内的口碑很高。」「二〇〇六年，我策划过莫言一行访问日本，当时跟萩野教授说了之后，他当即拍板，问我：你们什么时候有空儿，请莫言先生做一个即兴讲演。他的小说我差不多都读了，行文泥沙俱下，有气魄。在讲演当天，萩野教授坐在教室门口，他把座位让给了全场爆满的学生们。」此言确实不虚，因为我们教研组的几位老师，包括河田悌一校长，奥村老师和我都出席了讲演会，亲眼见证了掌声连连热火朝天的场面，至今记忆犹新。在那次讲演之后，我把莫言在他山东高密县老家和瑞典诺奖授予仪式，以及毛教授请来的随行摄影师肖杰所拍摄的莫言来访关大的照片（详见文末所附的三张），加上比莫言更早于二〇〇〇年便获得诺贝尔文学奖的法籍华裔作家高行健的图片放在一起，做了一个ＰＰＴ。每年给新生上课时，我必定把它演示给他们看，使之了解改革开放后的新文学，了解中国当代作家和当代文学走向世界的曲折历程。

二〇一〇年八月下旬，福州长乐的冰心纪念馆举办冰心诞辰一一〇周年纪念会，曾来我校访问的该馆馆长王炳根寄来了邀请函。萩野先生因故未能赴会，结果是我代替他前往参会。因为之前王馆长来访关大时，萩野先生让我参与接待，还算有一面之交。我在纪念会上听到了中国学者对先生的冰心研究的高度评价，对先生更加敬重了。我在该会的学术讲座上，把前年七月四日在英国牛津大学美国研究所召开的林肯诞辰二百周年纪念国际研讨会上所作的报告稍加修改后用ＰＰＴ发表了，幸好内容是关于近代日本和中国是如何知道林肯故事和理解林肯思想的，和冰心留过学的美国还有点关系，话题对与会者说来也比较新鲜，结果反映还不错，出发前的担心才算是一块石头落了地。托萩野先生的福，我第一次有机会访问福建这个山岭多方言也多的省份，观看了洋务运动时期兴建的马尾造船厂的遗址，会后又前往泉州看了宋代来华的伊斯兰商人的墓地和明末思想家李贽的纪念馆，还看了闻名中外的福建土楼（即所谓「土围子」），对客家文化也有了一点认识。

谨以此文纪念萩野先生。先生千古！

（关西大学名誉教授）

（上）莫言先生讲演会的情景
（在听众席右端，穿着白衬衫在听讲的是萩野先生；在讲台上坐在莫言先生左侧的是毛丹青先生）

（中）莫言先生为本科生源明题词

（下）在校园里并肩行走的莫言先生和萩野先生

萩野脩二先生を偲んで

吾妻重二

今年（令和四年）十一月十八日、萩野先生が亡くなられた。知らせてくれたのは内田慶市先生のメールで、コロナ禍もあって最近お会いする機会もなく、どうしておられるかと思ってはいたが、訃報に接してさすがに驚いた。ああ、先生は亡くなられたのだ、ご高齢であられたから、いつそんな時が来ても不思議じゃないのかもしれないとの想いであった。

ごく個人的な事柄を思いつくままに記して先生を偲ぶよすがとしたい。ご専門の中国現代文学に関しては他に紹介の適任者がいるであろうし、ご経歴や業績については関大を定年退職された時の『関西大学中國文學會紀要』第三十三号（二〇一二年）のほか、ウィキペディアにもちゃんと載っているので、そちらを参照していただくとよいと思う。

一つ目。先生についての最初の印象は平成三年（一九九一）、三重大学から関大に赴任された時で、すでに竹内実氏との共著『中国文学最新事情：文革、そして自由化のなかで』（サイマル出版会、一九八七年）を刊行しておられた。その時の印象は、中国現代文学に関するバリバリの先生が来られたとの感じであった。調べてみると、この時先生はまだ四十九歳、この分野ですでに立派な業績を挙げておられる印象だったが、実はこれ以後、先生のお仕事にエンジンがかかり、次々と業績を出されていったのであった。関大時代はまさに研究者として脂の乗った時だったわけで、その時期を一緒に過ごさせていただいたことを考えると感慨深いものがある。

二つ目。先生が中国文学科の人事委員（現在の専修連絡委員）だった時、学務委員だった私が外国語カリキュラム改革を図ったことがある。これは中国語の必修コマ数を増やそうとするもので、他のドイツ語、フランス語も同じように増やして文学部の語学教育を充実させようといくらか動き回ったのであった。結局のところこの目論見は独り相撲に終わってしまったが、先生はそのような未熟な案についても、にこやかに「うん、うん」と言って聴き入れ、私を咎めるようなことは一言もおっしゃらなかった。このことは先生のブログにも載っている。

三つ目。私が関大に赴任したのは昭和六十二年（一九八七）で、翌年から、神戸大学を退職して関大に来られた中国文学の伊藤正文先生と個人研究室を相部屋で使っていた。伊藤先生は大のお酒好きで、授業が終わると個人研究室に置いたウィスキーをいつも上機嫌でぐびりとやる、その時に聞いた話――。伊藤先生は若い頃、京都大学文学部に非常勤として出講していたことがあり、その時に教えた学生にとても優秀な学生が二人いたとおっしゃった。一人は「小南」、一人は「萩野」だという。小南一郎先生と萩

野先生なのである。

そもそも萩野先生は吉川幸次郎氏に憧れて京大の中国文学科に入学したというから、もともと中国の古典文学をやるつもりだったのだろう。その後、現代文学に方向転換されたわけだが、かつての造詣は中公新書『閑適のうた 中華愛誦詩選：陶淵明から魯迅まで』（竹内実氏と共著、一九九〇年）として結実している。先生は中国現代文学の研究者として有名だが、その基礎には中国古典文学の分厚い教養があったことを忘れてはならないだろう。伊藤先生のこの回想はたぶん私しか知らない話なのでここに記させていただく。

四つ目。十年前の平成二十四年（二〇一二）三月、先生が関大を定年退職され、南千里のホテルマーレ（今のクリスタルホテル）で退職記念パーティーが開かれた時の話。当時私は文学部長で、挨拶の中で「家では先生のことを家内と〝ハギちゃん〟と呼んでいる」と述べた。これを先生は〝ハゲちゃん〟と聞き間違え、不満げな口吻であったが、そうではありませんと申し上げて誤解を解いた次第である。このことも先生のブログに載っていたと思う。

問題はなぜ〝ハギちゃん〟と呼んでいたかだが、家内は中国現代文学を研究していたことがあり、先生にはいろいろお世話になった。定年退職後、ブログ「天涼 Tiānliáng」の記事をまとめた冊子を、いつも「奥さんに」と書き添えて送ってくださった。そんなわけで家で先生のことはよく噂し、親しみをこめてそう呼んでいたのである。

失礼な言い方になるかもしれないが、先生は文学青年のような風貌をずっと持っておられた。温和な笑顔やデリケートな話し方などは、いかにも「文学好き」な雰囲気を醸し出していたと思う。そのような若々しさ、穏やかさに親しみを感じて、〝ハギちゃん〟という呼び方が自然に出てきたのであった。

先生は八十一歳で亡くなられ、もうあのやさしい笑顔に接することはできない。ここでは瑣事ばかり述べ連ねたが、今思い出すと懐かしく、まさに「百感交集」の想いがする。先生のご冥福を心からお祈りするとともに、関大中国学の発展を見守っていただきたいと願う次第である。

（関西大学教授）

却道天凉好个秋

——怀念萩野脩二先生

王　炳　根（中国冰心研究会、冰心文学馆创始人）

去年十一月十八日，萩野脩二先生因感染新冠病毒逝世，我在得知消息后，给他的博士生牧野格子发去唁电。唁电中说：

因为冰心研究的原因，我与教授相识二十余年，他的治学精神与顽强意志，给我留下了深刻的印象。二〇〇五年我应他的邀请，前往关西大学进行客座研究，我们经常相聚，建立了很好的友谊。他和他的日本学者，总是积极地参与冰心研究会、冰心文学馆的活动，为冰心文学国际学术研讨会，提供重要的论文，为冰心研究做出了杰出的贡献。

萩野脩二教授不仅是我的朋友，是冰心研究会与冰心文学馆的客座研究员，更是一位对中国知之甚深的汉学家，是中国人民的老朋友，他对冰心书信集、对中国文化大革命文献资料的收集与研究、对描写中国文化大革命著作的翻译，都是开创性的工作。他的成果将在中日文化交流、人类文化积累中，留下宝贵的财富。

今年一月，牧野格子博士告诉我，将于三月份，在东京举行一个萩野脩二先生逝世写一篇怀念的文章，这个追思会恰好也就满足了我的情感的表达。

在中国的春节期间，我将萩野脩二先生赠送给我的著作一一寻找出来，计有十八本之多。这里有他的专著、译著，也有他近些年发表的博客短语，面对这一大摞的书，我感受到萩野脩二先生生命的顽强与创造力。他的心血管早就安上了支架，身体亏损到必须用「残疾证」待遇来照顾与保护，走路还得用拐杖戳着，平时不仅患有糖尿病、心脏病、肾脏病，寒冷时还会增加心脏肥大。用中国的话说，这是一个百病缠身的人，但他没有被病痛击倒，也不为病痛所左右，不悲观、不自暴自弃，豁达、坦荡、自信地向前走去，不断地在学术上、生活上创造奇迹，直至活过八十大寿。

作为一位知名的学者、教授，萩野脩二先生学术领域宽阔，他的十余本的《毕生独语》《终生病语》《愚生耳语》等，记录了他的部分学术生涯与交往，也是他的心灵写照。而我对萩野脩二先生理解，主要体现在两个方面：即是冰心研究与对五七干校的关注与研究。

关于中国的文化大革命，这是发生在一九六六年至一九七六年十年间重大事件，对于这个事件的研究，由于各种原因，在中国大陆尚难以完全展开研究。上个世纪七十年代，萩野脩二先生便开始触碰到这个历史事件，以后一直都在关注，撰写和翻译了不少描写文革的作品。进入本世纪初，萩野脩二先生将他关注文革的注意力，集中到考察与研究五七干部学校。所谓五七干部学校（简称五七干校）是在文革后期安置尚未解放的〝走资派〞、机关干部、专家、学者、作家与艺术家劳动改造的场所，这个临时建立起来的特定机

构，分布在中国交通较为方便城镇、乡县，前后的时间长达七、八年之久。进入五七干校的知识分子、作家艺术家，主要是接受劳动改造，同时学习毛泽东思想。中国大陆真正研究五七干校的学者可说是凤毛麟角，萩野脩二先生以他的学术敏感，关注到了这个在中国大地已经消失、却在中国历史上留下众多受难者形象的五七干校，这是一个了不起的举动。他作为万场るり子等四人共译的《翠山——『五七干部学校』小说选》的监修，撰写了序言与解说，阐述了翻译出版这部小说的社会与艺术的价值：他与镰田纯子、山田多佳子等共同翻译了《回想罗山》（上、下卷），这是中国对外经贸部王耀平等人，对设于河南罗山县五七干校的回忆文章。这是一批非常宝贵的资料，作者都是亲历者，在中国大陆也可能也没有如此翔实的记录出版。

萩野脩二先生不仅主持、参与翻译关于五七干校的著作与文章，他还亲自到了五七干校的遗址、现场进行考察。二〇〇八年九月，我曾陪同萩野脩二先生前往位于湖北省咸宁市的向阳湖，一九六九年到一九七六年，中国文化部、中国文联、中国作家协会、国家博物馆、商务印书馆等单位，联合在此建立五七干校，用于接受来此劳动改造的人员，前后计有六千余人，都是一些学者、专家、作家、艺术家，包括冰心这样年过古稀之人。他们在这里烧窑、建房，种棉花、蔬菜、水稻，养猪、养鸭等，同时进行政治学习，开展大批判。我陪同萩野脩二先生，走访了五七战士当年劳动的田野、养鸭的水塘，走进棉花地与泥泞的土路，体验他们当年劳动的情景，还走过五七战士当年用涵管修建的路桥。我们还找到了尚存的五七干校的校舍，与现居住者进行的交谈。由于时任咸宁新闻出版局局长、作家李城外先生的努力，利用当年的校舍，建起了中国第一座五七干校博物馆，陈列了大量的五七战士的劳动工具、生活用品、图片等，萩野脩二先生看得非常仔细、投入。这次考察，增加了萩野脩二先生对五七干校的感性认知，回到日本后，与山田多佳子共同翻译了李城外先生的著作《追忆文化大革命——咸宁五七干部学校的文化人》（上、下卷），该书描写了中国著名作家、诗人谢冰心、臧克家、张光年、周巍峙、韦君宜、丁宁、杨绛等四十余人在五七干校劳动、生活的情景。萩野脩二先生写作了《五七干部学校——中国知识人的受难》长文，表达了他的观察与思考。

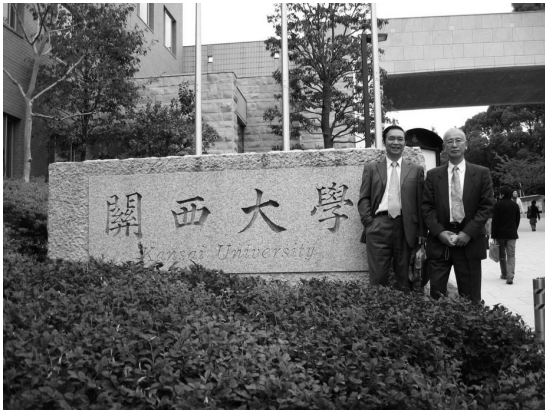
当然我要说到萩野脩二先生的冰心研究，这是他继《中国现代文学论考》之后最重要的研究，甚至可以说，冰心研究更优于他对中国许多现代作家的研究。二〇〇五年秋天，我应他的邀请前往关西大学做客座研究，就是建立在冰心研究这一个共同点上的，我们在开展学习、研究与教学中，互相切磋，寻找、探讨研究课题，萩野脩二先生总是提出一些具体而独到的观点与见解，我作为冰心研究的专家，也是受益匪浅。他也曾接受我的邀请，出席过在中国长乐、烟台与重庆举办的三届冰心文学国际学术研讨会，每次临会，都会提供新的研究成果。在第一届国际学术研讨会上（一九九九年），萩野脩二先生的论文《谢冰心在威尔斯利大学》，以他赴美现场调查所取得的第一手资料，论述了谢冰心在这所大学所受的教育与影响，尤其提出了谢冰心生病期间所住的疗养院，带有歧视性的隔离，这使读者能更深刻的理解冰心的《寄小读者》，理解她在这个疗养院提出的〝有了我的爱就有了一切〟和〝爱与同情〟的呼唤与主张。在山东烟台举办的第三届冰心文学国际学术研讨会上（二〇〇八年），萩野脩二先生的《冰心与烟台》论文，具体而微地梳理了冰心在烟台所受的教育与所读的书，尤其对冰心回忆文章中提到的〝明善书局〟，进行了辩证、考证，他根据周振鹤编的《晚清营业书目》，提出那个书局应为〝诚文信书局〟。我在《玫瑰的盛开与凋谢》与《冰心年谱长编》中，都引述了萩野脩二先生的这个考证，使之更

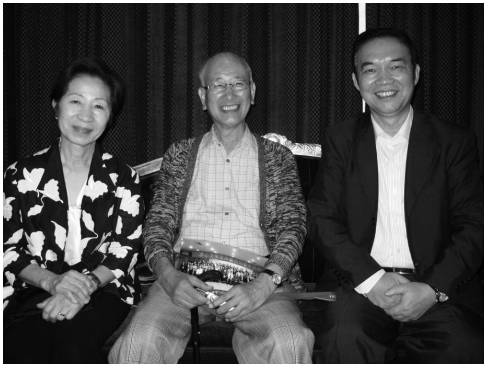
接近历史的真实。在重庆举行的第四届冰心文学国际学术研讨会上（二〇一二年），萩野脩二先生的论文《关于冰心的初期作品——从原初的感情出发》，提出了〝原初的感情〟这个概念，那么这个感情是什么？萩野脩二先生认为，「不是周蕾所说的社会学的感情，而是人类普遍拥有的纯粹的感情」。这里所说的周蕾曾在哥伦比亚大学出版了《原初的激情——视觉、性欲、民族志与中国当代电影》（一九九五年），〝原初〟的概念似乎来自于此，其实，萩野脩二先生早在一九九三年有过一篇论文《冰心在日本其二——原初感情的强度》（《关西大学中国文学会纪要》第十四期，一九九三年三月），所以，萩野脩二先生〝原初的感情〟是从冰心的作品与中国传统文化概括出来的，也就更加切合冰心的作品，这个观念实际上在潜意识中影响着中国研究者对冰心作品的认知与揭示。

萩野脩二先生最重要的研究专著《谢冰心研究》（朋友书店出版），二〇〇九年先生曾赠送我一册。由于语言的障碍，至今我尚未认真拜读这部大作，但我从著作的目录中，基本了解了这部作品的价值与意义，尤其是他提到的冰心作品国际性问题，令我感到这也是研究者的国际视野，只有具有国际视野的人，才能读到冰心作品的国际性。萩野脩二先生认为：「她的作品超越了中国这个国家，以及她以及她亲属关系所限定的特殊事物，也让外国人很容易理解。可以说思想家和情感的世界正在扩大。」（《谢冰心研究》第二三四页），我不知道我的这个翻译是否准确，但意思是清楚的，萩野脩二先生总是将冰心放在国际视野中进行比较与研究，所以，他的一生为此付出了不少的心血。现在他走了，我特别怀念他，如有可能，我将促成将《谢冰心研究》翻译成中文，让更多的中国读者从中受到教益。萩野脩二先生与牧野格子合译的《家庭人的手纸——谢冰心的文革》（关西大学出版部，二〇〇八年二月），即是冰心研究的重要内容，也是文革与五七干校研究的重要内容，这个双重意义的翻译与研究，使得萩野脩二先生走入新的学术。

萩野脩二先生喜欢中国文化，喜爱唐诗宋词，尤其他喜欢宋代词人辛弃疾（一一四〇—一二〇七）的《丑奴儿•书博山道中壁》：「少年不识愁滋味，爱上层楼。／爱上层楼。／为赋新词强说愁。／／而今识尽愁滋味，欲说还休。／欲说还休。／却道天凉好个秋。」他不仅是喜欢，还请多位中国作家、学者用不同地区的方言朗诵过这首词，并且加以录音，珍藏保存。我也曾经用赣方言为先生朗诵过，并且赠送了这首词的书法作品。如今这一切都成了美好的记忆。〝却道天凉好个秋〟，萩野脩二先生恰恰是在他喜爱的秋天，前往另一个世界，祈愿那个世界中的秋天与京都修学院离宫的秋天那么美，漫天的红叶，辉映着、温暖着先生所喜爱的秋天！

二〇二三年二月九日星期四于根舍





（上）与王炳根在关大合影

（中）在重庆，萩野与夫人和王炳根合影

（下）在重庆第四届冰心文学国际学术研讨会上作学术报告

因为懂得，所以温暖

追忆萩野脩二先生

毛　丹　青

与萩野脩二先生相识还是我刚到日本来的一九八七年的秋天。当时我在三重大学文学部留学，身份是研究生，研究方向是日本文化，本来打算在学问上热身之后，继续投考京都大学的大学院，但中途因为经济上窘迫，无力求学，只得与指导教官清水正之先生商量，最终放弃了继续深造的念头。如此决定貌似草率，但也是经历了内心的纠结。因为毕竟是从中国社会科学院哲学所直接赴日留学的，这在当时并不多见，尤其是我以「停薪留职」的方式自费留学，由此所获的留学期限是三年。换句话说，哲学所虽然不发我工资，但职位可以保留三年。这样的待遇对于今天的中国国家公务员来说，可能性基本上等于零。

萩野脩二先生当时是三重大学文学部的教授，也许是因为曾在北京第二外国语学院任过教的原因，在欢迎留学生的聚会上，他跟我说了很多北京的事情，而我刚到日本，很多事情并不适应，日语也不那么流畅，能跟日本教授用中文直接聊天，还能聊家乡解乡愁。无疑，萩野脩二先生是一位有超级亲近感的人。接下来，他单独请我吃饭，说起他研究赵树理的文学以及如何深读《小二黑结婚》，妙语连珠，让我深感日本学者研究中国文学的功力。当时，我心想今后能跟先生一样，研究日本也能入木三分就好了。

天下的事情变化多端。我为了去一家鱼店卖鱼，决定离开三重大学，在留资格也申请到了就劳签证。当我把自己弃学从商的决定告诉萩野脩二先生时，他当即就说：「祝贺毛君」。话语之间没有任何迟疑，而且还加了一句：「了解日本从脚下走起最好。」

后来，我从卖鱼做起，一直做到了活海鲜以及冷冻鱼虾的进出口贸易，数量很大，去过很多国家，几乎每月都出差，中国护照上的出入境印章全都盖满了。为此，我到中国驻大阪的总领事馆去加页，在护照上贴出了一条挺长的拉页。

萩野脩二先生家住京都。有一年在新年贺卡上，他说自己也离开了三重大学，目前在关西大学任教，研究课题依然是中国当代文学。我当即给他打了电话，并说：「祝贺萩野老师。我给您送鱼」。随后，我们约定好了日子，我开车从名古屋的鱼市一直开到京都市内，送鱼送到了他家。萩野夫妇款待了我，谈话中得知他的研究还包括冰心，手头上也在研究中国文革的五七干校，话题很丰富。后来，也不知说到何处，说起了我的中国护照，于是我拿出来给他看护照上的加页。萩野脩二先生一看我把加页拉了出来，放声大笑，同时打趣地说：「这难道不是护照的舌头吗？」

再后来，我离开了商界，二〇〇〇年出版了第一本日语著书《日本虫眼纪行》，写的是走访日本各地的见闻与实际的感受。其实，这也是应验了萩野脩二先生当年跟我说的那句话「了解日本从脚下走起最好」。同年，我因这本书在神户市获得了文学奖，萩野脩二先生

发来了贺电，上面写的附言是：「你送来的鱼很好吃，你写的书也很好看」。

作为日语作家，大都是因为工作关系，我与中国作家们的接触越来越多了。二〇〇六年邀请莫言先生到大阪寻访川端康成旧居的时候，我跟萩野脩二先生商量，他当即就说请莫言到关西大学做一个即兴讲演，题目就叫《文学与故乡》。从策划到执行，所有的安排都很顺利，成功的讲演会尤其要感谢萩野脩二先生。二〇一二年莫言先生作为第一位中国国籍的作家，获得了诺贝尔文学奖，而那场即兴讲演几乎验证了当时的关西大学对中国文学研究的进取与充实，堪称是一个黄金的时代。在同样的时期，我还记得萩野脩二先生让我到他的共同研究室与大学院的院生们交流，他跟我说：「除了中国文学之外，欢迎毛君也跟大家说说在日本卖鱼的经历，这也可以成为文学的一种。」

二〇〇九年，我开始到大学任教，萩野脩二先生在京都款待了我，他举起杯子对我说：「现在，同样作为大学的先生，我们这算同僚会吧。」他是用中文说的这句话，很慢很优雅。

萩野脩二先生是一位很暖心的绅士，一位杰出的中国文学的研究者。晚年疾病缠身，但仍然通过ＦＢ向好友们发出信息，对生活充满了爱意与热情，令人感动。萩野脩二先生千古！

（毛丹青　神户国际大学教授　关西大学社会学部客座教授）